

第34回 2015年2月25日

ゲスト 梅井丈治（関西テレビ 元プロデューサー 現大阪狭山市文化振興事業団  
SAYAKA ホール館長）

テーマ テレビの特性“同時性と意外性”を追求  
「パンチDEデート」「ふるさとZIP探偵団」

主な内容

- ◎高校の先生からテレビ局ディレクターへ
- ◎クラシックの音楽番組を作りたかった
- ◎宝塚歌劇から「舞台中継」の基本を学ぶ
- ◎長寿番組「パンチDEデート」 実は深夜の「ナイトパンチ」が前身
- ◎男女の出会いをゲームに 三枝と西川きよしが新コンビ
- ◎アイデアは「無」から出てこない 着眼点がキーポイント
- ◎新しい旅番組「ふるさとZIP探偵団」は“郵便番号”がヒント
- ◎「さんまのまんま」 テレビの特性 同時性と意外性を組み込む
- ◎ホール館長としての夢 “観衆とクラシック音楽で遊ぼう”

司会 今日、元関西テレビのディレクター、プロデューサー、そして関西民放クラブの「コール・まかーな」のメンバーでいらっしゃる梅井丈治さんにお越しいただきました。現在は大阪狭山市にある SAYAKA ホールというホールの館長で、現役の仕事の続きをそのまま、まだ続けることが出来るという非常に羨ましい立場にいらっしゃる方です。

かつて「ひと目会ったその日から、恋の花咲くこともある。見知らぬ貴女と見知らぬ貴男にデートを取り持つ、パンチDEデート！」という番組をお作りになった方で、まだ多分、その場面、場面を覚えている方がいるかもしれません。改めてご紹介いたします、梅井丈治さんです。

梅井氏 どうも梅井でございます。なにぶん、私も間もなく 82 歳になりますので、いろんな昔の記憶というものが薄くなっていると思いますが、ひとつよろしくお願ひしたいと思います。

司会 私は結構、この「パンチDEデート」を見ていて、忘れ難い三枝さんの台詞がありました。ご承知の通り、カーテン越しに、男性と女性が分かれています。カーテンの真ん中のところに覗き穴があって、向こうから見て、いろんな表現をするんです。その中で、三枝さんが「安産、満月、臨月」という表現をしましたが、うまいこと言うもんだなあと思いました。たぶんこちらの男性のほうは「安産、満月、臨月」というのはどんな女性なのかなあと、想像していたんじゃないか。アドリブなのか。今、思い出しても、なんとなく笑いが込み上げてくるような気がいたします。さて、梅井さんは、堺のご出身で、地元の高校から同志社大学に進み、グリークラブで歌い、それから指揮もしておられました。1957（昭和 32）年に大学を卒業されて関西テレビにと、ご紹介したいところですが、関西テレビの開局が 1958（昭和 33）年だったので、1 年間、全く別の仕事をしておられました。どんな仕事をなさっていたのかというところから、お話を伺います。

<高校の先生からテレビ局ディレクターへ>

梅井氏 ちょうど私が卒業する前年、31 年でしたか、OTVが開局しました。「ああ、テレビ局が出来たんだ」ということで、見学に行ったんです。すると、受付に綺麗な女性が座っていて、テレビ局っていいなあ、明るくてと思いました。ただし学校が紹介してくれたのは、上本町にあった上宮高校なんです。私は英文科出身なので、仕方がないから、まず英語の教師をやろうかと思っていたんです。それで上宮高校に行ったんですが、仏教系の学校なので、本当に僧院みたいに暗いんですよね。ところが、非常に明るくて、モダンなテレビ局の様子を見たものですから、上宮高校は断ったんです。しかし、次の年に果たして受験が可能かどうかも

分からないので、ちゅうちょしていたところ。私の母校、泉陽高校の英語の先生たちから「おい梅井、お前来い」とか言われました。それで、泉陽高校の英語科の講師としてまず入って、1年間、英語の教師を務めたわけです。そうするうちに、関西テレビとか、その他たくさんのテレビ局が出来るというニュースが入ってきました。しかし、教師というのは、受験勉強ばかりをさせなきゃならない、文部省の決めたカリキュラムを全部こなしていかなければならない、それから良い大学に入学させた教師が、良い教師である、ということに少し抵抗がありました。私はやっぱり、教師というものは、その年代、年代での人格形成というものをしっかり、見ていかなきゃならないと思っていましたので、英語を教えても、英語のテキストの中でいろんなことを喋っていきたくかった。それが出来ないんだっただらということで、教師を諦めて、新しいテレビ局の様子を、研究し始めたというわけです。

—— 開局ですから、随分、大勢入社したみたいですね。

梅井氏 そうですね。200人だったと思いますね。前田久吉さん（当時、大阪産経新聞会長）のつくっておられた電気学校で試験を受けまして、産経系ですから、産経パーラーで入社式。そのときに、「大体、何人ぐらい入ったんでしょう」と聞いたら、200人という答えでした。テレビ局で200人というのは少ないのですが、200人の精鋭で行くんだと沢村義夫専務に言われて、はあそうかと思いました。

—— もう社屋とかの形は出来ていたんですか。

梅井氏 全然なかったです。

—— ああ、そうですか。どんな風な形で、梅井さんのディレクター生活は始まったんですか。

梅井氏 ですから、ディレクター生活が始まったのは、社屋が出来てからなんですが、すぐに研修に行かされ、NHKとか、既存の局に全部配置されました。東京は当時ラジオ東京テレビジョン（現TBS）とNHK、名古屋へ行った人はCBCに行きました。私は東京へ行って、TBSとNHKで研修を受けました。その頃はまだ社屋が出来ていないので、天六の阪急バスの車庫に、出向の年配の方、新入社員とか全員集まって、何かレクチャーのようなものを受けました。レンズも何も付いていないミカン箱の下に三脚を付けて、新春座とか、その辺の若い役者さんたちを呼んで来て、台本を渡して、どうのこうのと芝居を付けながら。撮らない

カメラを引っ張り回して、こういうもんだと言いながら、遊んでいたようなものですね。で、時間が余ったら、ソフトボールをしたりとか。各社も当然、そういう時代があったと思いますけど、関西テレビはそんな形でした。

——— それでもちゃんとお給料をもらえたんですね。

梅井氏 そうです。当時は11,600円か、そんなもんだったと思います。  
例えば、この前、野添泰男（演出家、関西テレビ元専務）さんが話されたときに、歌劇団の演出助手の最初の給料が6,800円とか7,000円とかっていうことだったんですからね。  
その当時、ドリフターズが歌っていたのは、13,600円とか800円とかね。そのちょっと低いぐらい。

——— さて、実際にテレビ局らしいことが始まるのはどんな形で、いつごろですか。

梅井氏 ご存知のように昭和33年に開局しましたが、テレビ制作の経験者は三人しかいなかったんです。先ほどの野添さんは、OTVにおられたのですが、これから出来る関西テレビの社長である小林米三さん（阪急電車社長小林一三の三男）の関係もあって、元宝塚歌劇団の演出家でしたので、こちらへ来られたでしょう。それと日本テレビから藤信次さんというドラマ担当のディレクター。あとは制作部長として、NHK東京の楽劇課長小泉祐二さんという方、制作部の次長として、宝塚歌劇団から岡さんという音楽家兼アレンジャー、そして東宝関係で編成に、東宝北野劇場の支配人をされていた角倉節朗さんとかが来られました。ですから、希望は制作演出課と言ったら、演出課に配属されました。

——— ほお。割と自由に言ったところに配属されたんですね。

梅井氏 皆、大体言ったところに、行っているんじゃないでしょうかね。

——— 演出と言われたのは、どういう理由だったんですか。

梅井氏 放送局に入りたいなと思ったのは、やっぱり番組を作りたかったからですよ。大学の頃に毎日放送のラジオの芸術祭参加作品。毎日の庄野潤三さんが作られた宮沢賢治のイーハトーボの世界を描いた、ミュージカル・・・。

——— 作ったのは、和田精さんですね。潤三さんは朝日放送で、庄野至さんが毎日放送。

梶井氏 至さんが。そうか。すみません。昔のことで失礼しました。

そのときに「よだかの星」(宮沢賢治)という小さなお話がベースだったのですが、凄く感動して「ああ、ラジオを作りたいなあ」と思いました。ただ、私は絵も好きだし、そんないろいろなものを使えるなら、テレビのほうが面白いかなあと。単純なそれだけのことなんです。

——— テレビの経験者が三人しかいないということは、どっちかを師匠にして番組を作っていないといけないんですね。

梶井氏 そうです。だから、どちらかと言うと、野添さんは音楽物を中心に、それから藤さんはドラマを中心にということで。あとは社会教養とかですね、報道部に来られたのは、産経新聞から石浜典夫さん。それからラジオからも。昔、登録する前は、「大関西テレビ」という名前が付いていて、それで関西のあちこちの企業やラジオ局から、皆さん来ていただいていたの態勢でした。

だから京都放送からもアナウンサーの方が見えていたし、神戸からは吉川良次さんをはじめ、ディレクターで来られていました。そういう風にラジオを作っておられた方、それといわゆる芝居の劇団(文学座)の演出をされていた中村信成さんとか。また映画の助監督・橋本隆亘さんとか、鍵田忠俊さんとか、そんな人が集まって、それこそ手探り状態ですよ。

しかし、開局した11月22日は、梅コマの中継がメインでしたが、初めてのことで、本当にもうてんやわんやなんです。そこへ総務の人が、全員に開局祝いの饅頭を配れというのですが、そんなもの渡してられないよと喧嘩みたいなことになって、大慌てでしたけど。そんなこんなで、11月22日になんとか開局しました。

——— さて、それからいよいよ野添組に付いて。

<クラシックの音楽番組を作りたいかった>

梶井氏 そうですね。私はクラシックの音楽番組を作りたいかったです。クラシックの音楽は、何となく敷居が高いとか言われています。凄く綺麗なメロディーがたくさんあって、それを何とかしてテレビでも映像と組み合わせ、クラシックの音楽を普及させたいという思いがあったんです。だから音楽ディレクターを目指していました。

——— 高校・大学とやっておられたコーラスがベースになっていたんですか。

梅井氏 そうです。一応、楽譜が曲がりなりに読めるということだけなんです。

—— 楽譜が読めて、こういうところでカット割りが出来る人は、多くはなかったですよ。

梅井氏 そうですね、特にオーケストラなんかの中継のカット割りは凄く大変だったんです。

NHKの研修に行ったときに、福原さんという音楽部長に教えられた昔のオーケストラ撮りのカット割りは、A B C Dとカメラが4台あったら、それぞれのカメラの下に時間軸でマス目を作り、Aの最初のカットで何を撮るか。指揮者かオーケストラか。その次Bはソロが始まるからフルートをアップで撮るとか。C, Dは何を・・・とその順番を入れていくわけです。その間に何秒あるかと秒数を放り込んでいくわけです。それは本番とリハーサルの秒数は、ちょっとずれてくるんですけどね。ミニチュアスコアとレコードでずっと曲を勉強しているのですが、大体の寸法しか分かりません。だからカメラマンにも、この楽器は何か、オーケストラの編成と各楽器を全部、教えなきゃならなかったですし、たまたまブリテンというイギリスの作曲家が作った「青少年のための管弦楽入門」という曲があるんですが、楽器が順番に全部出てきます。まずその楽器の絵を描いて、変わることがありますけど、おおよその位置を書いて、これだということで、スタジオでオーケストラを入れて、それを教えていくということはやりましたね。関西交響楽団、今は大フィルですけど、そこの事務局に小野寺君という友人がいたので、関響に来てもらってやりました。

—— そうですね。小野寺さんも確か同志社グリー出身ですよ。

梅井氏 そうです。だからグリークラブ出身の方といえば、同志社だけでも、A B Cの中島完治さん、M B Sの野村忠さん、大河内さん、O B Cの岡本さん、辻さんたちがいらっしゃいますからね。意外と各大学のグリーの人がテレビ局にいますよね。

—— ご自分でも音楽番組を作っておられて、ディレクターの生活がスタートした。

梅井氏 そうなんです。ですから「お昼のメロディー」とか、夜は「夜のしらべ」とか、「あなたと夜と音楽と」といった、そんなタイトルをつけましてね。その当時、NHK大阪放送局に放送管弦楽団大阪放送合唱団があり、「民放でも出られるか」と聞

くと、NHKが「いいよ」って言うてくれたので時々その人たちとも仕事をしました。

—— 打ち合わせで伺いましたら、「子供たちの音楽会」とか「スクリーン・ファッション」とか。

梶井氏 そう。やっぱり子供たちの音楽会というのが一番親御さんも見てくれるんです。バレエの教室、歌の教室、ピアノの教室とか、いろんな教室を回ってピックアップ、推薦してもらい、そして女性アナウンサーを歌のお姉さんにして話をしながらそこで演奏してもらう「私たちの音楽会」というのが結構長かったんですよ。

—— 宝塚はもう入社してから、ずっとかかわっておられたんですか。

<宝塚歌劇から「舞台中継」の基本を学ぶ>

梶井氏 そうですね。入社して、とにかく音楽に関する番組には大体付いていましたね。宝塚は野添さんがメインのPDでした。宝塚歌劇の番組は「宝塚テレビ劇場」「宝塚バラエティー」「ザ・タカラヅカ」・・・等、名前がどんどん変わっていきました。ほとんど付いていました。

—— やっぱり舞台中継が多かったんですか。

梶井氏 いえいえ。最初はスタジオでの作りが多かったです。間にテレビ中継もありました。だから、両立てだったんです。その内、生徒のスケジュールがどんどん忙しくなってきた、特にトップスターや上級生の。仕方がないから、テレビ用のメンバーを作ろうということで、音楽学校を終えて新入団した生徒を10人ぐらい集めて、1年間はテレビ専門の「バンビーズ」というチームを作って、南安雄さん、山田卓さんといった先生をお願いしてスタジオショーを作っていました。

—— 公開になるのはいつ頃からですか。確か、公開録画で2本撮りだったんですよ。

梶井氏 そうです。「バンビーズ」が出来てからですが、大阪厚生年金中ホールや豊中の市民会館とか、芦屋の芦屋ルナホールへも行きましたかね。その後、宝塚歌劇場の中に「バウホール」が造られたので、そこに定着しました。

—— 私も公開番組の前説をやっていたので、よく覚えていますが、宝塚にしては初めての試みだったんですよ。

梶井氏 外へ出て行ったのはね。

—— いわゆる舞台中継とスタジオでの宝塚の作り方については、どんな風に思っていましたか。

梶井氏 そうですね。創られたものを撮るのと、一から作っていくのとの違いですからね。劇場中継もさることながら、スタジオで作っていくことは面白いですね。ショーに限らず、「民話劇場」等を、宇野信夫さんとか、竹内勇太郎さんとかの本を頂きに行き、民話のドラマを作るというようなことが結構、長かったです。宝塚番組の中で、一番視聴率の良かったのは「民話劇場」です。民話の後、世界の名作童話集に取り組みました。昔、宝塚の大劇場の横におとぎ劇場という子供向けの小劇場があったんですよ。「長くつ下のピッピ」とか、「名探偵カツレくん」といった新しい作品も作っていました。

—— 舞台中継では随分勉強されたと言いましたけれども。

梶井氏 うち、北野劇場の中継がレギュラーでありましたので、中継のために、1週間ぐらい通って、上手から出てくるのは誰それとか、下手から誰が出て来てどこで止まるとか、それを絵コンテにしてカメラマンに配ったりして、1週間ぐらいかけて撮っていましたからね。宝塚の中継も、その流れの中であつたんですが、一番気にするのはダンスなんです。ダンスをどう撮るかということカメラマンたちと研究するのですが、FFで撮っているのに、足首ぐらいで切ったりするんですよ。

踊りにかかわらず、絵作りの問題がありますよね。

宝塚に限らず舞台のセオリーですけど、上手へ出て行ったものがまた次、上手から帰って来るっていうのは、行って戻って来るということになるんで、時間が経っているときは、必ず下手から回れとか、来るはずだとか。それから宝塚は大勢の人がワーワーあちこちでやりますから。その芝居を、一つずつメリハリをつけて見せていかなければならない。同時に行われている芝居をどう見せるかというのはもの凄く難しいんですよ。芝居はそういうことなんですが、ショーに関しては出来るだけダイナミックな映像にしたいということで、ローポジとハイポジのカメラは必ず作るとか、例えば、オケピット（オーケストラ・ピット）の中にカメラを放り込んでローポジの絵を撮るとかやっていましたね。

一番難しかったのは、アップショットのカットバックで役者の位置関係をどう理解させるかということでした。



—— 野添さんも随分、厳しい先生だと伺っていますが。

梅井氏 本当にもう、厳しかったですよ。

—— ここに来ていただいたときは、いかにも好々爺という感じで。

梅井氏 私は入ったときは、クラシックばかりやっていたんですが、野添さんに教えられたのはジャズとかポピュラーの録り方なんです。その曲の、小節数というのは8、8、8、8、大体4×8の32小節でワンコーラスですよ。例えば即興の演奏にしても、演奏楽器がそれぞれ移っていくにしても、8小節をどう勘定するか、そればかりやっていたね。1、2、3、4、2、2、3、4と言いながら。曲のカウントの取り方は野添さんから教わりましたね。

—— さっきおっしゃったルーズショットとかフルショットとかは、どうでしたか。

梅井氏 皆さん、専門家の方ばかりですので、そんな話しても。

—— 映像の撮り方をどういう風にして勉強というか、研究したというか、梅井流にいろいろと考えられたんでしょうか。

梅井氏 学ぶというと映画しかないわけですから、映画館へ行きました。長回しのカメラワークであるとか、そういうことも全部含めて、映像に関しては映画から大体学びました。ただ、アップサイズの効用はテレビのものでしたが。

—— テレビは、その当時、非常に新しい世界でしたから。自分でどんどん作っていくという面白さ、楽しさがあったんでしょうか。

梅井氏 そうですよ。だからよく言われますが、我々の時代は一番テレビの作り手にとって良かった時代ですよ。作りたいと思って企画を出すと、大概通る。通ったら作れるという。今は可哀想ですね。

—— やっぱり今でもテレビとか映画を見ると、絵作りとか、構図は気になりますか。

梅井氏 気にはなりますが、ストーリーテリングが主体のものが多く、あんまり映像でどうのこうのっていうことはないですね。それからそういう番組が、あまりな

いですよね。ただ、CG等の技術には驚きです。ついていけません。

——なるほどね、逆にね。

梶井氏 芸術祭（文化庁）華やかなりし頃は、皆、何か難しい絵を撮りましたね。どうしてそんな絵を撮るのかなってというようなものも撮っていましたが、吉永小百合さんの旦那でフジテレビの岡田太郎さんなんかも、画面の両端へぐっと離して顔だけ、両方の顔だけ入っているのは、この間の空間の持つ意味を言いたいのかなというのがありました。

——そうか。僕らみたいな、いわゆる普通の視聴者はそこまで考えませんが、生業としている人は、いろいろと考えたんでしょうね。

梶井氏 考えましたね。だから、役者からは凄く言われましたよ。こちらは絵ばかり考えていくもんですから、芝居がやりにくいんですよね。タイトに向き合っている芝居のときに、カメラをちょっと盗んでくれとかね。そうしたらもう、「そんな形で芝居出来ないよ」と叱られました。こちらは絵ばかり考えていきますからね。

——なるほどねえ。そんな中、カンテレの社史から引っ張り出してきた、ちょっと別ページになっていますが、「パンチDEデート」、こういう番組が生まれました。真ん中のハートマークに電気が両方とも灯ると、こんな風に若いカップルが誕生する。それで例えば、ここで覗いていて、「オヨヨ」とか言っているんですが、片っぽの思いがNOだと、片っぽしか電飾がつかない、そういう仕掛けになっていました。楽しい番組でしたが、この番組が生まれるきっかけは何だったんですか。

<長寿番組「パンチDEデート」 実は深夜の「ナイトパンチ」が前身>

梶井氏 ずっとやってきた音楽番組は全然視聴率が取れないし、だんだん作れなくなってきました。当時、読売テレビが「11PM」という深夜の枠をずっとやっていて、フジテレビも、遅ればせながら、深夜枠を設けて「テレビナイトショー」を作りました。そのときにフジテレビは月・水・金を作るけれども、関西テレビと東海テレビは、他の二日をやってくれということで、関西テレビは火曜日で東海は木曜日になったんです。深夜のパラエティーを作るということで、皆、初めはワイドショー的な内容で、作っていました。ところが、フジテレビの「ナイトショー」は、視聴率がもうひとつで、1年後「トゥモロー」と、ちょっとニュース性を含んだような名前に変えたんですが、「トゥモロー」もあつという間になくなってしまったんです。

そのとき、私ども関西テレビが作っていたものが、面白かったので、それはローカルで残すということになりました。制作費はその当時、フジテレビからの配分が100万円ぐらいだったんですが、「80万円でどや？」とか言われて作ったのが、「ナイトパンチ」という番組。パンチといえば週刊誌「平凡パンチ」がちょうど出てきたときで、若い人たちがよく読んでいました。このパンチもありますし、当時、百何十年続いていた英国の「パンチ誌」という有名な風刺雑誌があって、これは政治的な風刺、ギャグを漫画にしていましてね。そこで表面は面白いけども、中身にそういう精神を入れようと、「ナイトパンチ」というタイトルを付けて、スタートしたんです。お笑いの人たちばかりで作ると、お笑い番組になってしまうので、せっかくだからと音楽も入れたんですよ。ちょっとした夜の楽しい番組にしたいなと思って、作り出したということですね。だから、オープニングには、アロージャズオーケストラ、北野タダオはじめ、皆がバーッと吹いてくれて。エンディングはザ・フレッシュメン古谷充と4人のメンバー、ピアノの大塚善章で締める。その間を吉本、東宝芸能、松竹芸能の芸人たちで埋めていくという番組にしたんですけどね。

—— なかなかお洒落な番組です。

梶井氏 お洒落なということをやりたいだったんです。パンチの利いた風刺とか。最初のコーナーが、仁鶴さんの「パンチDEトピックリー」というトピックスでびっくりをと「トピックリー」と名付けました。

—— ああ、「びっくり」を。

梶井氏 夕刊からザーッと、面白そうなネタを拾って、池田幾三さんとか、吉本の竹本浩三さんとか、もっと若い人中村進さんとかいましたけど。新聞を配って、面白い記事をネタにして作っていくわけです。それをオープニングのあと、仁鶴さんが読んで、笑いのオチを付ける。というようなニュース番組風の、夕刊の事件案内みたいなことをまずやって、その次はラウンドテーブルで、パーンと仁鶴さんがいて、あれはアル・カポネなんですよ。あと、コメワン（コメディーNo1）、三枝さん（今は文枝）、カウス・ボタンさん、上岡さん、ノックさんが入って、ラウンドテーブルでヤクザの会議をするんです。後ろにスクリーンをかけて、その日のテーマネタを映すという。ウォーターゲート事件でニクソンを取り上げ、それについて仁鶴さんが皆に振っていくわけですよね。まあ、何と言うんでしょうか、大喜利でもないですけど、そういうお笑いトークショーみたいなもの、それを最終的に一つの結論・・・結論じゃないけれども、笑いでひとつ皮肉ってしまうと

いう。それが「パンチ」の精神なんです。情婦役の由美かおるさんが始まったら、全員に、酒を配って行って、最後にコメワンのところにポンと置くと、坂田さんが由美かおるのお尻を触る。すると、由美かおるが怒って、トレーでカーンと頭をたたくと「ザ・タッチャブル」とタイトルが出るというコーナーだったんですよ。

当時人気のあった「アンタッチャブル」をパロディーにしようと思って+「ザ・タッチャブル」。何でも触れていこう。何でも取り入れていこうという、そういうナイトショーでした。

——— それで「パンチDEデート」は・・・。

梅井氏 そうなんです。金曜日の夜が面白いということで、木曜日にもう1日作れということになったんです。それなら木曜日は全然違うアングルでいこうと、視聴者参加を頭から売り出したんです。「やす・きよ」のやすしさんの事件があって、一人だった西川さんと三枝さんの二人で新しいコンビを作るということを思い付きました。それで木曜日は、各コーナーに視聴者が出て来るという作りにしたんですよ。加茂さくらの「社長室」、カウス・ボタンの「町で見かけたカワイ子ちゃん」。それでスタジオに連れて来てやるとか。全部、「パンチDEなんか」というタイトル名を付けていたんですよ。人生幸朗さんがちょっと沈んでいたんで、人生幸朗さんを入れて「パンチDEひとこと」という3分コーナーを作りました。3~4人の素人を呼んで来て、生で言わせる。最後に人生さんがやって来て、あの調子で締めるというようなことで。

——— 「責任者出てこい！」ですね。それで「パンチDEデート」は・・・。

梅井氏 そうそう。その中で、デーティングコーナーを作ろうと思ったんです。皆さんに対して、釈迦に説法みたいなことですが、人間の持つ名誉欲、金銭欲、色欲、の三欲のいずれかを取り込むことが視聴率につながるの考えから、若い子はやっぱり異性というものを意識しているので、そういったものを入れたらいいなと思ったんです。ずっと見渡したところ、そういう類は古いものから言うと、蝶々・雄二さんの「夫婦善哉」。それから、「仁鶴・きよしのただいま恋愛中」、そして、「新婚さんいらっしやい」。すべてABCですね。

【注】蝶々・雄二の「夫婦善哉」は1960年代、「ただいま恋愛中」は1970年1月から、「新婚さんいらっしやい」は1971年1月に始まり、現在も継続中。

<男女の出会いをゲームに 三枝と西川きよしが新コンビ>

梅井氏 そういう、男女を扱った視聴者参加番組はたくさんあって、フジテレビも「おもしろい夫婦」を作りました。それじゃあ、今までにないのはというと、出会うまでのやつがないなということで、出会いのゲームを作ろうと、デーティングゲームにしたんです。「テレビお見合い」という番組は、その前にもありましたが、若い人たちが、そこでそれぞれの異性とどんな話をするのかとか、どういうことを考えているのかということを知るのも面白いので、そういうデーティングゲームにしようということから始まったんです。

構成者の池田幾三さん（放送作家）とはずっと一緒にやってきたので、何かセンスが合ったんですね。それで話しているうちに、単純だけれども、あの形になりました。

ハートが、半分で切れたら、ブロークンハートになる。ハートに対する僕のイメージは、実はペイネ（1908年～1999年）の漫画なんですが、詩人ですから発想が凄く楽しいんですよ。胸の中をパッと開けたら鳩がいるとか。音符の雨が降ってくるとかね、そんな感じのハートの絵があったので、「よし、ハートをなんとか使おう」と思いました。男組と女組に分かれて、その間にカーテンがあるだけ、カーテンの真ん中に覗き窓が一つ付いているという、セットとしては本当に単純なものなんです。

一組が11分半なんですけど、その間に一つの状況が進んでいく。初めは、声だけしか聞こえないという状況です。三枝さんも西川さんもどんな子が来ているか知らないんです。こういう司会者も知らないという状況を作って、お互いが聞いていく。聞いていくうちに、イメージしていきますよね。そのイメージでどこまで作り上げられるかということがまず第1段階なんです。その次に、それじゃあ、ちょっと見てみようかと言って、司会者が出て行って覗きますね。“オヨヨ”というやつですよ。事前に「あんた誰が好きなん」と聞いていっているんです。例えば「吉永小百合」と言っていたとすると、おそらく「吉永小百合というよりも、吉野のなんとか桜やな」と、そういう言い方をするんですよ。で、「～というよりは」という言葉が流行ったんです。それは彼女たちが、あるいは彼たちが、こんな風に見たいと、言ったのを持って行ってそこで瞬間にそれを司会者がどんな風に言うか。それが面白かったんですよ。

それでまたイメージをもう少し膨らませるといって段階が次にあって、いよいよご対面ということで、カーテンを上げる。初めてお互いを見るわけですね（驚き、意外性）。

そこで3分間のトークタイムを作る。そしてその次が問題なんです。意思決定をせないかん。とにかく、気に入ったか、気に入らないかということのボタンを押すことによって、ハートがつくか、つかないかという仕組みになるわけです。

人生にはどこかで決断を迫られるときがある・・・これはちょっとした人生の縮図です。

そんなこんなで、割と人気が出て来たので、独立させようということになって。で、日曜日のお昼の単独番組として、ちょっと偉くなったんですよ。しかしタイトルは、「パンチDEデート」なんですよ。「それ、なんやねん！」ということになります。が、「ナイトパンチ」のデートコーナーですから、「パンチDEデート」なんです。パンチの本体はどこにもないのに、そのままいってしまったというのは不思議なことですが、それが「パンチDEデート」なんです。

—— 二つ伺いたいんですけど、一つは、覗き窓から覗いて、「～というよりも」というのは、完全に彼らのアドリブだったんですか。

梶井氏 そうそう。

—— その場で、三枝さんにしても、きよしさんにしても、そういうものを、常に「～というよりも」というネタを考えていたかもしれない。

梶井氏 考えている暇が・・・。考えられないでしょうね。瞬間ですよ。見たときにどう思うかしかない。

—— それまで全く知らない対象ですよ。なるほど。

梶井氏 それはもうその瞬間。

—— もう一つは「パンチDEデート」の「DE」なんです。

梶井氏 「ドゥ」なんてかっているフランス語。何もありません。「DE」が面白いと思ったんです。ちょっと喋っている感じがするじゃないですか、「ドゥ」とかいうのがフランス語的で、「パンチDE（ドゥ）デート」。英語も入っていますが。ただそれだけなんです。

—— 木曜日は、生でやられたわけですね。

梶井氏 金曜日も生だった。木・金と。

—— 日曜日に「パンチDEデート」となったときは。

梶井氏 日曜日は、ビデオです。

——— なおかつ、これは公開番組になっているんですね。

梶井氏 そうなんです。フェスティバルホールの下にあったABCホールですか。あそこへ移して、ずっと公開でやりました。

——— それまではスタジオの中にお客さんを入れて。

梶井氏 そう。観客席を設け、舞台を設け、カーテンも付けて。スタジオでやっていた。

——— やっぱり公開となると、SABホールのほうが盛り上がりませんか。

梶井氏 そうですね、格好は付きやすいですからね。

——— さっき言われましたけど、「～というよりも」とか、「オヨヨ」といった流行語を生みましたね。あれはやっぱり偶然の賜物ですか。

梶井氏 そうですね。だから「オヨヨ」と三枝さんが言ったことに、後で、小林信彦さん（小説家）からクレームが付いたんですよ。彼が書いた「オヨヨ島の大統領」（「怪人オヨヨ大統領」角川文庫）という本があったので、そこからの盗作ではないかと言われたんですが、三枝さん側の「いやいや、それはあんまり意識がなかった。オヨヨと言ってしまった」という発言で、無事和解しました。

——— 「パンチDEデート」は1973（昭和48）年から1985（昭和60）年まで続きました。途中、ローカルからネットになるんですね。ということは、出場者も関西ローカルじゃない人たちに変わりますね。

梶井氏 変わりますね。大変だったんです。その頃、僕はもうそこにいないんですよ。作って3年ほど、あとはプロデューサーがどんどん代わって行って、ご存知の高崎さんがその後のプロデューサーをされてました。僕はスタジオとABCホールだけなんですけど、彼らはハワイへ行ったり、あちこちでやったり、良い思いをしているんですよ（笑い）。

—— プロデューサーの立場からご覧になって、ローカルのとくと、ネットになってからとでは何か変わっていますか。それとも関西以外の人達も味が出ていましたか。

梶井氏 地方色が出たらそれはそれなりに面白い。その土地へ行って、言葉のこともありますし、その地の若い人の考え方というのもちょっと違ったりしますからね。この番組は、年寄りが見ても、今の若い人の考え方とかそういうものを知るためにも面白かった。と同時に、ハートがつくか、つかないか、飲み屋で賭けている人がいましたね。オーディションのとき、「お前は男だから、ご対面というときに、絶対ランプをつけてやれ」と親父に言われて来ましたという男の子がいましたね。

—— 長くやっていると、それこそ若者の生態の移り変わりとかが見えてきたんじゃないですか。

梶井氏 まあ、移り変わりとまではいかなかったですが、彼らはゲームだと思って来ていますからね。ハートをパーンとつけても、外にアッシー君が待っていて、車に女の子を乗せて帰っちゃうなんてことが、ありましたから。ただ、結婚したのも二組ありました。

—— ああ、そうですか。そういうもんですかねえ。

梶井氏 ブームになったのと、装置が簡単なので、一時、学園祭でよくやってくれましたね。

—— 僕がシンガポールで在勤中の三洋電機の社長さんが関西出身者。シンガポールはなかなか結婚しない国なんで、その社長さんが、この「パンチDEデート」を思い付いて、工場を一日休みにしたのかな。男女別にいろんな候補者を出して、司会者がいて、カーテンの仕切りこそなかったんですが、それぞれの言いたいこと、アピールとか。男の人はこんなことが出来るとか、女の方はこんなことが出来るとか、そんなことを言わせるんですね。それで最終的に相性が合うかどうかみたいな。

うまくいったら、シンガポールの近くのバタム島というリゾート地へ一泊二日のご招待とかね。三洋電機ですから、電化製品をなんとかとか、そういうことをやっていたんです。この「お見合いゲーム」は海外まで行っております。

梶井氏 この間、ベトナム・ホーチミンテレビで、作るからどうのという話があつて。作ったようです。ただその短い中に構成されている先ほどの三つのポイントをはず



すと駄目ですね。

—— そのポイントが、この番組が長続きした理由になるというのですね。

梅井氏 そうですね。

—— 出場者はやっぱり予選なんかをされるんですか。

梅井氏 はい、オーディションをしています。

—— その話はかなり本番の中で生かされることになるのですか。

梅井氏 そうですね。オーディションの場合、男性はきよしさんに、女性は三枝さんに話をするということをやっていました。

—— 1 番組、何組ですか。二組でしたか。

梅井氏 30 分番組ですから、二組ですね。

—— このコンビは後々、いろいろとコンビで仕事をしましたね。

<アイデアは「無」から出てこない 着眼点がキーポイント>

梅井氏 そうですね。やっぱりアイデアというのは、無からは出て来ない。有はやっぱり有からしか出ないと思うんですよね。その有の集め方とか、いろいろデータみたいなものの中から連想ゲーム的に何か面白いものが出たときに、その組み合わせをどう生かすか。その着眼点で新しいアイデアが生まれてくる。だから、これは、やすしさんのおかげでもあるわけですよ。きよしさんが一人だったから出来たので、  
「やす・きよ」が二人でずっといたら、この番組は出来なかったでしょう。

—— そうか、そういう偶発的な状況もあったんですねえ。

「ユニークな番組、ヒット番組はどんなところから生まれたんですか」ということを最後に伺いたかったんですが、それも今、おっしゃったことの一つですね。さて、そんな中、もう一つ、ユニークな番組が出来ます。これは、私の大好きな番組だったので、梅井さんにぜひこの話をさせていただきたいとお願いしたんです。

「ふるさとZIP探偵団」というのが、1989年の4月から、1999年の9月まで土曜日の昼間に放送されていました。旅番組、バラエティー番組とインターネットで検索すると出て来ます。探偵は原田伸郎さん。それから「男はつらいよ」に出て来る佐藤蛾次郎さん。そして新藤栄作さん他となっています。「他」の中には、後々、私の後輩の桑原征平というアナウンサーも出て来るんですけど。これもやっぱり何かのヒントで、ピンと閃いて出て来たんでしょうか。

梶井氏 そうですね。あれはたまたま、エイトプロダクションという関西テレビ関連の制作会社の制作部長をしていたとき、「どっきりカメラ」みたいな番組を作っていたのですが、当時、流行りましてね、結構、12～13%の視聴率を取っていたんですが、クレームでほとんど毎回、謝りに行かなあかんわけですよ。「もう、やめよう」と言うと、局は「やめたら次の番組でパーセンテージ取れるか」、とくるんです。それを言うと、ずっとやっていかなきゃいけないし、ということでやめようと思ったんです。その代わりに、それぐらいの視聴率を取れなきゃいけないし、というわけで、営業と話をすると、郵政に持って行きたいと言うので「分かった。郵政に持って行くんだったら」ということで考えたのが、実は「ZIPコード」だったんですよ。

——— 郵便番号ですか。

<新しい旅番組「ふるさとZIP探偵団」は“郵便番号”がヒント>

梶井氏 郵便番号が日本で採用されてから、まだほとんど年も経ってなかったときですよ。僕は、旅番組で凄くつまらないなと思っていたのは、行った先々で旅館とか何かにちゃんと出来上がった料理があつて、それをどうのこうのというものばかりだからなんです。出来るだけそういうものじゃなくて、その土地の人たちとの出会いとか、食べ物があつてもいいから、そんな形での旅番組を作りたいな、その切り口をどうしようかと思案したんですよ。

そんなときに、郵便番号がやっと出来たところなので、郵政に売りたいんだったら、これが切り口としてベストだということで、郵便番号で地域を決めて行くというスタイルで何とかやろうと思いました。どこに行くのかということを決めるためには、誰かがどこそこに行くぞと決めなきゃならない。これも好きだったテレビ番組「スパイ大作戦」をヒントにしました。「君たちのミッションはこれだ。なおその責任は当局はいつさい取らない」と言って、バーッと消えちゃうテープ。あのスタイルをずっと、やりたかったんですよ。ちょうどパソコンが出て来たときだから、コンピューターでそういったものを出すということにしようやないかと、探偵事務所にして。探偵事務所の中には女ボスがおりましてね。これは冴木

杏奈というタンゴ歌手。ちょっと面白かったので、歌のほうが好きだったんですけどね、コンピューターを据え付けて。探偵を三人ほど入れようということで、原田伸郎、佐藤蛾次郎、新藤栄作という三人の男たちを探偵（リポーター）にしよう決めました。これはエクスプレスへ制作発注したんですが。

その千里のスタジオにセットを組んで、探偵事務所を作りました。それは半地下みたいになっていて、道が見えて、自転車が走るのが見える、そんな事務所にしようと言って。それから三人にキャラクターを付けたほうがいいなど。原田君は非常にソフトで、女の子が好きなタイプなんで、優しいということで、巧みな口舌ですよ。それから蛾次郎君は、料理が達者なので、包丁を持って行く。新藤君はスポーツマンだから、必ず自転車に乗って行くという。そういう三人のキャラクター付けをしたんです。郵政に売ると言ってくれていたんで、その産地の産物があったら、ゆうパックで送ることまで付けて、編成から営業に渡したのに、売れませんでした。しかしZIPコードを使うというのは面白いからそれでいこうということで、とりあえず、そういう形で作りました。

その流れをくんでいるものの一つが、毎日放送が角淳一さん、原田伸郎さんらでやった「夜はクネクネ」。ああいうのは面白いなあと考えていたので、そういうのをちょっと拝借して、旅番組にしたということなんですけどね。あと、今のNHKの「鶴瓶の家族に乾杯」にしてもそうですが、皆、そんな形の番組になっていると言えらると思います。なかなか面白かったですよ。僕のまあ遊び心から生まれたものですけどね。

——— この番組は、結構、長く続いているんですよ。

梅井氏 そうなんです。これは、13年ぐらい続いて、「パンチDEデート」が12年ちょっとなんです。結構、長いこと。それから僕が東京に行って作った「さんまのまんま」（1985年～）は、今もまだ続いているでしょう。だからね、ちょっと2、3本でも、長寿番組を作っているんですよ。

——— ああ、そうか。「さんまのまんま」もそうですか。

<「さんまのまんま」 テレビの特性 同時性と意外性を組み込む>

梅井氏 そうなんです。「さんまのまんま」は僕が東京の制作部長として異動したときに、編成局長だった巻幡展男さんに「東京に行くから、餞別ください」と言ったら「そうやなあ。よし分かった。月曜日の7時やるわ」と言うんです。月曜日の7時は視聴率が低かったアワーだったので。

—— 巻幡というのは、後々、カンテレの社長になる人なんですけれども。

梶井氏 当時、僕は編成の企画チーフをしていましたので。そこから東京の制作部長に行くときに、どうせ行くならと、餞別として枠をくれると言って。それで、もらってきたんです。東京の吉本興業の支社に「やす・きよ」のマネージャーだった木村政雄君（後に吉本興業常務）がおりまして。「ナイトパンチ」とか作っているときは、彼がまだ同志社を卒業してすぐのときで、割と親しくしていました。彼が東京担当になって、東京で番組を作るというので、「東京の吉本興業には誰がいるのか」と聞くと、ダウタウンとさんまですと。

東京で木村君と話をして、さんまで作ろうということにしたんですよ。どんな風にしようかというときに、同期の小田切成明というドラマのディレクターの従兄弟で、小田切正明というのが東京支社のディレクターでいて、彼と一緒に、考えました。僕はそのとき、音楽番組から離れて、トーク番組ばかり作っていたから、動きのあるトークショーを作りたいなと思ったんですよ。だから、部屋の中でも動き回るとか、誰かがやって来るとかいった形のね。

タイトルを付けることになって、小田切君が言ったのか、さんまのそのままの感じを出す番組にしようと、「さんまのまんま」というタイトルを付けました。ABCの「丁稚どん」に伝次郎という犬がいましたね。岡崎君という名優が中に入っていましたけれども。その岡崎君に、まんま人形を作りたいと言って、それで「まんまちゃん」を作り、キャラクターにしました。終わった後にまんまちゃんがひと言、言うという風にしようかと。そういう組み立てで出来上がったんです。フジテレビで作っていました。東京で作っていましたから、タレントが来やすいですよ。

—— そういう利点はあるでしょうね。

梶井氏 そんな流れですね。

—— さんまさんも何十年前ということは、結構、20年・・・

梶井氏 もっと前ですよ。東京に行ったのは、僕が50歳のときですよ。ですから、もう30年ほど前でしょう。

—— さんまさんはとても若かったし、初めからああいう、人さばきみたいなものが出来たんですか。

梶井氏 まあ、出来ましたね。それともう一つは、フジテレビの美術部と話をして、さんまに黙ってセットの中に何かおもろいものを仕込んでおこうやないかと。冷蔵庫なら冷蔵庫の中に何か面白いものを入れておいて、お客さんが来て何か出すときに、さんまがびっくりするとかね。そういう美術部とさんまが、試合をしようかというそんなことも、ちょっと含んでいたんです。さんまの瞬発力とか、意外性とか、そしてテレビの持っている特性である同時性というものを組み込んでいくようなものにしました。

—— かなり構成をされているものなんですか。

梶井氏 そうですね。構成って、中身は作ってなくて、枠だけです。ただ誰が来るかということだけですからね。

—— あとは全部さんまにお任せするのですか。

梶井氏 そうですね。ディレクターとしては、楽をしてダメなんです、作りだけをしっかり作っておくという。

—— でも、キューを振っていたのが小田切君だとすると、さんまさんが持っているリズムとかスピード感、そういうものを映像で。それと相手のアクションとかを、もっと随分、出していないといけない番組だと思いますね。

梶井氏 そうですね。

—— フジテレビのスタジオですか。

梶井氏 そうです。

—— こうして見ていると、結構、さんまさんも、三枝さんも、きよしさんも、ユーティリティーのある、かなりアドリブが効くタレントさんで、なおかつ、人当たりが良いというか、彼らのキャラクターに負うところが大きかった番組ですよ。

梶井氏 当然そうですね。

—— 単に司会をするとかなんとかというよりも。

—— 「さんまのまんま」の中で、彼はそこで、こういうことが出来るんだということ  
と、似たようなキャラクターということもあってか、日本テレビかな、大勢タレ  
ントとかお笑いさんとか、あるいは女性ばかりを集めてやっている番組がありま  
すよね。何かそういうことの突端<sup>とっばな</sup>だったんでしょうかね。何かこう、さんまの新  
しい魅力が出来た番組なんでしょうね。

梅井氏 ありましたねえ。女の子をいっぱい集めて、今もやっていますね。

—— 「さんまのまんま」が、ここまで長く続いている魅力は、何なのでしょう。

梅井氏 考えてみると「さんまのまんま」には、昔やっていた「スター千一夜」の要素も  
あるんですよ。今、流行りのタレントたちを呼んできて、そこで、作ったもので  
も、格好付けたものでもなく、結構、素直に話をしますよね。その辺の面白さと、  
やっぱり今ウケているタレントが出て来るとい、そういうタレントニュース性  
みたいなものを上手く、面白トークに持ち込むさんまの瞬発力と話芸、その辺じ  
ゃないですかね。

—— それと、ゲストの魅力とか、素顔を引き出すのは非常にうまいですよ。

梅井氏 うまいです。

—— 最近見たのでは、今、NHKの木曜時代劇に出ている吉田羊というね、

梅井氏 出ていますね。いいですよ、なかなか。

—— それから「達人達」のナレーションをやったりと、良い女性のタレントがいます  
けど。彼女がこんな人なんだろうなと想像していたところが、そのまま現われて  
来たので、やっぱりうまいんだなあ。あれはいきなり会うんですか。おそらく、  
特にリハーサルもないんでしょうね。

梅井氏 ありません。

—— やっぱり。全く初めて会うんだ。

梅井氏 今はどんな風になっているのか、私にも分からないので。

—— 「ふるさとZ I P探偵団」の話に戻りたいんですが。「ブラタモリ」(NHK)はワンカメラみたいに見えて、本当はあちこちから撮っているというね。大勢のカメラクルーを見てしまうと、ちょっと白けるんですけども。「Z I P」はカメラ1台だったんですか。

梶井氏 そうです。取材というか、現地収録は、アシスタントのカメラマンはレフ板(レフレックス)とか、マイクとかいろいろ持っていくますが、ただ、1カメラ長回しということではなく、編集ものですからカット数はかなりあります。

—— そうしますと、結構、冒険的なものもあったんですね。

梶井氏 そうです。ただ、これもENGが生まれての、その産物かも分かりません。

—— 原田伸郎さん、それから蛾次郎さん、栄作さんという非常にユニークな、それから新藤栄作さんは、割合、さっぱりしたキャラクターだった気がします。この辺りは、どういう人選だったんですか。

梶井氏 そんなに、大層な人選じゃないんですよ。取材地に行って、人当たりも良いし、皆が少しは知ってくれないと困るので、そういうところでザッと選んでいった中で、うまくスケジュールも合ったということです。ただ、それぞれのキャラが同じでないということ。

—— なるほど。毎回、探偵は一人でしたよね。

梶井氏 このうちの誰かが行くんです。三人いて、「次はお前行け」とかいうことで。

—— あとはスタジオで処理するという。何か記憶に残る、こいつは面白かったなみたいなものって覚えていらっやいませんか。

梶井氏 そうですね。誰が行くかというときの決め方。それは皆、結構、好きのところ、良さそうところへ行きたがるわけ。そのときに、探偵事務所長・冨木杏奈が、ピシッと「伸郎さん、行ってください」とかね。彼女は、タレントといっても実はタンゴ歌手ですから、面白かったです。だから雰囲気ですよ。人間ばかりじゃなくて、事務所の雰囲気とか、人間を取り囲んでいるところの、「さんまのまんま」であればセットや内容とかね。そういったものは無視出来ない。

そういったものが、全部入っていて、番組というのは面白くなってくるし、楽しくなってくるんです。

——— それから「ZIP」は都市部には行かなかったんですよね。

梶井氏 あれは僕が、ローカルって限定したんです。都市部に行ってしまうと、散漫になってくるのではないかと思ったので。しかもローカルで、その郵便番号をまずは知ってもらうということが必要と思ったんです。そのうち、スペシャルとかで都市部に出ていきましたが、それは、僕がいなくなってからのことで。

——— それもあって、ZIPコードというのは、随分ポピュラーになりました。郵政省から表彰されたとかそういうのはありませんでしたか。

梶井氏 全然、ないですねえ。

——— それからインターネット検索では、謎のボスは最後まで謎だったという風に出て来るんですけども。これは・・・。

梶井氏 それは永遠の謎ですよ。ボスは僕なんですから。

——— そうですか。ネット検索では謎のままになっていますが、今日の出席者には初めて正体が分かったわけですね。なるほど。というオチが付きました。  
梶井さんはこうやって拝見していますと、「こういうものを作りたいな」ということをかなりの程度、実現なさったのかなあという気がします。一番自分が作りたかった番組が出来たなあというのは、どれだったんですか。

<ホール館長としての夢 “観衆とクラシック音楽で遊ぼう” >

梶井氏 そう言われると辛いんですが、どれがと言われたら、初めからこれを作りたいというのはなかったんですよ。ただ、それぞれのニーズの中で自分のアイデアが上手く生かされてきたという満足感は全てにあります。

本当に僕が作りたかったのは、音楽番組なんですけど、それは作れなかった。特にバーンスタイン（作曲家、指揮者、1918年～1990年）が、「音楽のよろこび」という本の中で、詳細につづっているようなもの。これに基づいた音楽番組がNHKで放送されたことがあります。番組が先で、本が後だったかもしれません。

ホールに視聴者・観衆がいて、ステージの上にはピアノがあり、後ろにオーケストラがあって、バーンスタインがピアノを弾きながら、いろんなことをやってい



るんです。音楽クイズみたいなものもありますし、例えば、スタックカートと何かの違いとか。観衆と交流しながら、その日のテーマの楽曲というものを作り上げていって、最後、バックのオーケストラと共に演奏して聞かせるという。

僕は、ホールでもそういったものをずっとレギュラーでやっていきたいと思うんですが、オーケストラを一つ使ったら、400万円とかかかりますから、なかなかちょっと。

—— センチュリー（日本センチュリー交響楽団）を安くしておきますので、SAYA KAホールで使っていただいて。

昔、本多俊夫さんがやっていたNHKの番組があるんです。それはオーケストラも入って。僕は1本だけ残しているのがあるんですけど、佐藤しのぶさんが、「メリー・ウィドウ」の・・・

梅井氏 ヴィリアか何か歌って。

—— 歌うんですね。そういうNHKの番組が大変好きだったんですが、ああいうところしか出来ないのかなあ。

—— 佐渡裕が1回、やったことありますね、1回か2回。

梅井氏 そうですか。佐渡さんね、ああいう人がやって、ああいうのをきちんと作っていたら、面白くて、クラシック音楽に対しても凄く親しみが出来てくるんですけども。

—— 今のテレビには、NHKも含めて、いわゆる楽しい音楽番組というのはなくなりましたよね。

梅井氏 そうですね。NHKは「N響アワー」を長くしましたね。それから「らららクラシック」というのが30分番組でありますけれど。

—— そうですね。土曜日の9時30分ですかね。そういうのはやっぱり見ていらっやいますか。

梅井氏 見えています。

—— 今でもやっぱり作りたいなあという気持ちはおありですか。

梶井氏 気持ちはありますが、テレビは全然作れないですよ。CGとか、本当に技術テクニックが凄く発達してますでしょう。僕らには考えられないですね、僕らはピンキッターを手で切って、照明と一緒に「おい、どんな影出る」とか、タイトルバックを撮るのに、水槽の中に、何か色絵具を、そこにミルクを垂らし、動きと色の変化を作り、そこにテロップを乗せるとか、そんなことばかりやっていたからね。今のあの作りを見ていたら（当時の手法は）あかんなあと思いますね。しかし企画は立てられます。

——— それから、今の放送とかテレビマンには、自分が何を作りたいかということを見失っているんじゃないか。こういう意見がありますが、どう思われますか。

梶井氏 テレビ局に入って来るときに、どんな思いで入って来ているのかがまず分からない。テレビ局もモノ作りから、財務、営業などいろいろ分野はありますが、自分が携わらなくても、そこで放送しているモノが、その会社の商品ですから。それに携わりたいとか、作りたいとか、意見を言いたいとか思ってくるんじゃないかなとは思いますが。だから制作部に配属されている人間は少なくとも、自分が何を作りたいか、次はこういうものを作ったら面白いのではと常に思って欲しい。番組の企画会議には、必ず外部の構成者がいて、ブレンというのが何人かいて、そこで出た意見をまとめるみたいなことをやっていますね。ディレクターたるもの、やっぱり自分が作りたいものを先ずは持たないとあかんと思いますね。制作方法がいろいろ異なっても。

——— なるほど。今のテレビでは、どんなものを見ていらっしゃいますか。さっきの「ららクラシック」とか「N響アワー」とか。

梶井氏 そうですね。今、BSフジか何かで、夜の8時からやっているのがありますね。

——— 何番組ですか。

梶井氏 あれは、そのときの人を呼んでくる報道番組ですかね。

——— ごつい顔した反町理キャスターがやっているのですか。「プライムニュース」（月～木）ですね。

梶井氏 それとか、あとはやっぱりNHKのものが多いですね。とにかく、朝ドラ「マッ

サン」は見ていますよ。もうひとつ大河は、今回は面白くないですが、見ています。それから、「木曜時代劇」も時々見たりしますが、特にこれというものはありませんね。

——— しかし、今までのスピーカーの中でもかなり見ておられると思います。バラエティーはどうですか。

梶井氏 本当にバラエティーと思えるものはないんですよ。ほとんど皆、集まってゲームをすとかクイズをすとかでしょう。

——— それとかお笑いさんが集まって何か・・・。

梶井氏 ただ、「嵐」が面白いですね。嵐というグループの各個人がいいなと思いますね。そういう意味では、今まではジャニーズ系なんてとって思っていましたけども、やっぱりジャニーズさんの思想がそれぞれにしっかり入っていると思うんですが、やっぱり、いいですよ。

——— それぞれ結構、お芝居、司会、コメンテーターというのが出来たりね。

梶井氏 そうそう。ピンでいろいろとやっていますね。二宮君にしても「硫黄島」とかね。だからそういう意味では、あそこのタレントたちは、なかなかだなと思いますね。

——— どうですか。夢を抱いて、大関西テレビに入られて、制作としてやって来られて、SAYAKAホールでいろんなことをイベントを含めておやりになるに当たって、テレビをやってこられたものが随分、活かされていますか。

梶井氏 はい、全くそのお蔭です。私の場合、特に宝塚歌劇から学ばせていただきました。ただ、阪急は、制作費を節約しなければなりません。しかし、やっている者にとって、凄い財産になりました。スタジオで作るということもありましたけど、舞台の上でも作ったんです。大劇場が跳ねた後、タレントを集めてそこで作らないと、他に作る場所がないということもあって、そこで作りました。そうすると、舞台機構を全部覚えるわけです。だから、舞台の大階段、大ゼリ、小ゼリ、袖にあるスッポン（小型のセリ）。それから幕。袖幕、中割幕という割幕が何枚かあります。上には、照明隠しの、一文字等。そういう風に舞台機構を、セリも含めて、照明のバトンと美術バトンとの兼ね合いとかいうことを全部覚えてしまうわけですよ。そうすると、テレビだけでなく、舞台の演出

も出来るということに自然になっていました。今、ホールの仕事をしていて役立っています。

—— なるほど。有無を言わせぬものがあるわけですね。

梶井氏 そうですね。関西テレビでもらったいろんな財産の中の一つが繋がっているわけですね。

—— 今のディレクターには、なかなかそういう機会がないかもしれませんね。でも、やっぱり先輩としては、そういうことはやって欲しいでしょうね。

梶井氏 そうですね。機会があれば、積極的に。

—— 今日はいくつか資料を見せていただきましたけれども、こういうものを、自分の勉強として、素養として、どれぐらい持っているかというのは作り手としてはきっと必要なことなんでしょうね。

梶井氏 我々のアイデアの素は、新聞記事、あるいは書物、活字といったものが中心ですので、今でも本屋に行けば、これ使えると思って買うんですよ。しかし、よく考えたら、どこで使うねん。家に持って帰ったら家内が言うんですよ。「使えるというけれど、あなたどこで使うの」って。しかし、そういうのが習性になっていて。それと自然から学ぶ力をつけることでしょうか。

—— それは松村さんが書いたものですか（「パンチ」素描集、松村昌家編、岩波文庫）。

梶井氏 そうです。はい。

—— 今回、この例会で 2 回目に野添さんにお話を伺った際、野添さんには、関西テレビ初期の頃の宝塚の番組のお話をさせていただきました。今回は本格的に大劇場・スタジオで番組を作られた梶井さんということで、改めて項目を立てて、宝塚のお話を伺いました。

梶井氏 しかし宝塚というのは、やっぱりえらいもんですね。踊りにしても音楽にしても、一流の先生方ばかりを集めていますでしょう。

—— （先生として）長谷川一夫さんと呼んできますものね。

梅井氏 特に日本舞踊系統の先生たちは皆、宗家の方ばかり。花柳芳兵衛さんとか、西川右近さんとか、各派の流派の人たちが、家元クラスの人たちばかりということは。あそこに入った人は恵まれています。

——— 「ベルサイユのばら」の1回目のときは長谷川さん呼んで来て、いろんなものを見ていただいたんですね。

梅井氏 はい、脚色・演出は植田伸爾さんですが、特別に演出として招かれました。

——— 宝塚は今でもご覧になりますか。

梅井氏 時々ですね。

——— 宝塚クリエイティブアーツでお仕事しておられたのは、館長になられる直前までですか。

梅井氏 はい。僕が70歳になるまで8年間です。

——— ちなみに奥さんは宝塚の方ではありません。というようなお話でございました。どうもありがとうございました。

(梅井氏は会の終了後、「パンチDEデート」についてこんなひと言を)。

長いこと続きますね、制作する者が変わってきますでしょう。最初の考え方とか思いとか、それがだんだん薄れてきて、一番良く知っているのは誰かというところになってくるんですよ。

もうそうなってくると、制作者がいろんなことを考えてどうのこうのというところにはいなくなる。だから長寿というのもすべてが良いのか悪いのかちょっと分かりませんけれど。

——— なるほど、そういう話があったんですか。

以上